◆ 花葉会賞受賞者紹介

生産から販売まで幅広く活躍

籾山秀之氏

略歴

昭和４３年　千葉大学園芸学科卒
　　第一園芸株式会社入社後、オランダ、イギリス、アメリカにて研修、その後海外品種の導入や、国内外への販売に活躍
平成４年　第一園芸取締役に就任
平成１０年　第一園芸プランテック常務取締役
　　富士小山農場長に就任
平成１２年　第一園芸常務取締役
　　トルコエーゲプランテック花卉園芸(有)社長
　　第一園芸オランダ事務所長を兼務
平成１６年　第一園芸取締役顧問
平成２４年
　～２６年　園芸文化協会理事
平成２６年　第一園芸を退職

海外での活躍から

籾山氏は、昭和43年に園芸学科（花卉研究室・小杉清先生）を卒業後、第一園芸株式会社へ入社されました。当時の第一園芸は種苗の品種開発・生産等を行っておりました。その種苗部門を伸ばすべく情報収集のため、若き籾山氏は昭和46年に海外へ向かわれました。それから約１年半、海外に活動拠点をおき、オランダでは球根輸出会社、イギリスでは生産農家、アメリカでは販売先や仕入れ先を訪問され、情報収集に努められ、昭和48年２月に帰国されました。

帰国後は開発から販売まで多方面で活躍

帰国後、国内では園芸小売店への家庭向け園芸商材の卸販売や、生産農家への種苗の販売を担当され、幅広い商材を扱われました。

海外研修で構築した関係をいかした輸出入では、オランダ、イタリアなどヨーロッパへの鉄砲百合、アメリカへは盆栽・ボタン・シャクヤクの輸出。韓国へはカスミソウ、グラジオラス等の輸出等の業務を次々こなし、世界へ優良品種を紹介されていました。

また販売だけでなく、生産部門を取りまとめる長としても活躍され、すぐれた品種の生産に尽力されました。北海道のユリ、岩手のスイセン、新潟のチューリップ、島根・鳥取のチューリップ、アイリス、鹿児島の鉄砲ユリなど生産地と密接な関係を作り、生産地と種苗会社の互いの発展に尽くされました。

海外品種の導入や開発では海外研修の経験を生かし、カーネーションをはじめ海外の優良品種の導入にも携われました。平成６年には当時第一園芸の品種開発会社として設立した第一園芸プランテックの取締役に就かれ、平成10年には常務取締役、富士小山農場長に就かれ品種開発部門を担当されました。任期後半にはペチュニアをはじめとした一般家庭向け品種の開発や商品化の指揮をとられ、ガーデニングブームの市場へ優良品種を次々と送り込まれてきました。

生産農家向け種苗の生産分野では、種子生産では中国、インドでの生産地を開拓されました。セル成形苗では国内外で事業の立ち上げに尽力され、国内では九州に設立したスタータープランツ社で指導力を発揮、平成４年に三井不動産、三井物産、第一園芸がトルコにて興したセル成形苗生産会社、トルコエーゲプランテック社の立ち上げを担当され、平成６年には九州のスタータープランツ社の取締役、平成12年にはトルコエーゲプランテック社社長として舵取りをされました。

活躍の場を種苗会社に置きながら、品種開発・生産・販売と多岐にわたる分野で国内外の花卉業界の発展に大きな貢献をしてこられました。ご退職前の３年間は園芸文化協会の理事を務められるなど、社外にむけても活躍の場を広げられました。

平成26年第一園芸を退職され、今も元気に園芸を楽しまれていらっしゃいます。

（文責：猪熊雅雄）

◆ 花葉会賞受賞者紹介

虫とともに50年

望田明利氏

略歴

昭和４４年３月	千葉大学園芸学部園芸学科応用昆虫学研究室を卒業
同年　　４月	武田園芸資材株式会社（現　住友化学園芸株式会社）に就職
平成１０年５月～平成１９年５月	（公社）緑の安全推進協会緑の安全管理士会会長
平成１６年７月～平成２６年５月	（公社）園芸文化協会監事
同年　　５月～	同協会理事
平成２３年２月～	ＧＡちば・花緑の会会長

望田さんは新潟に生まれ、1969年千葉大学園芸学部を卒業後、同年４月、前年武田薬品工業株式会社の100％子会社として設立された武田園芸資材株式会社（現 住友化学園芸株式会社）に就職されました。

花葉会には植物産業に関わる方が多い中で、家庭園芸用の薬品や肥料などの開発普及に従事し、薬品の適正使用など啓発活動に尽力され家庭園芸業界の裾野を広げ、わが国の家庭園芸技術の向上に貢献されました。

設立当初６人でスタートした武田園芸資材株式会社で唯一の植物栽培経験者であった望田さんは、顧客の課題、課題解決のストーリーを把握し、氏ならではの企画運営に取り組まれました。担当業務は総務、経理以外の営業、開発、普及を経験され、幅広い知識と経験をいかし同社の業績に大きく貢献されました。

開発業務では農薬の委託試験で各地の農業試験場を訪問し、家庭園芸独自の適用を他社に先駆けて取得するべく試験担当者と打合せを重ねました。当時は一般の農薬会社が生産者向け農薬を小容量化して販売し、園芸愛好家向けの商品が無い中、望田さんは家庭園芸専門会社という独自性をいかし、愛好家にとってわかりやすく使いやすい商品開発に取り組まれました。試験実績のない新規作物と病害虫についての評価法の確立には一から検討が必要で、委託窓口の（社）日本植物防疫協会との折衝にも苦労が多かったそうです。

普及業務では商品ラベルや技術資料など製品情報の収集、整理を行い、広告宣伝業務では商品ガイドの企画制作に携わり、その理念とノウハウは業界を牽引する同社の基礎として現在も引き継がれています。また、園芸専門店に加えてホームセンターでも園芸資材販売が増加する時代の中、店頭販売員の知識向上が重要と考えた望田さんは、薬品、肥料、用土、鉢に関する販売の手引き書の作成を手がけ、その内容は店舗の販売促進に大いに貢献しました。一方で、業界で初めて小売店様を集めて各地で開催した講習会では、専門講師として病害虫や植物栽培を解説し、課題解決の秘訣や薬品、肥料の使い方、薬品の安全使用等の普及啓発を行い、さらに、小売店の現場に直接出向いて勉強会を行うなど普及活動の基盤を作られました。講習での的を射た内容、意表を突いた展開、笑いを交えたトークは、暖かい人柄とあわせて多く方々に好評を得ました。

また、家庭園芸業界では初めての同社研究所の設立にかかわり、浜松市北区テクノポリス内に初代製品開発センター長としてその礎を築きました。

業界対応では、（公社）緑の安全推進協会において同協会設立当時から農薬の安全・適正使用の普及や指導を行う緑の安全管理士会会長を10年間歴任されました。協会における家庭園芸農薬ラベル表示要領作成では、農水省農薬対策室に何度も足を運んで一般農薬との違いを説明し、常識的な注意事項は登録とかかわらず自主表示できることを認めてもらいました。さらに、家庭園芸で不要な一般農薬の適用作物を除いた「家庭園芸用」登録の創設について尽力されました。「農家と家庭は異質である」をモットーに粘り強く訴えられた結果と聞いています。

園芸業界においては、2004年７月より（公社）園芸文化協会の監事となり、2014年５月からは同協会理事を努められ、地元の千葉県においては2011年２月よりＧＡちば・花緑の会会長を努めるなど、現在も引き続き業界の発展にご尽力されています。

（文責：草間祐輔）